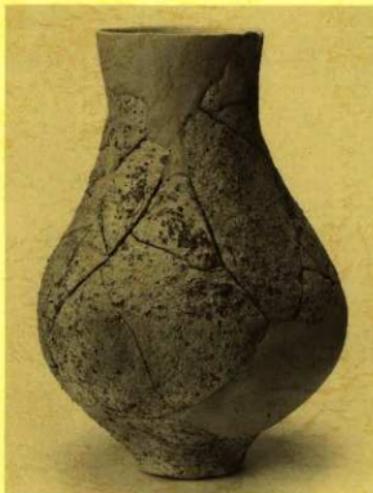


池上曾根遺跡 II

—拠点集落北東方の墓域の調査—



2000. 3

大阪府教育委員会



はしがき

池上曾根遺跡は、わが国を代表する弥生時代の遺跡として知られています。それは、明治36年ころに弥生土器や石器が遺跡内で初めて確認されたことに端を発します。遺跡の全貌が明らかにされたのは、第2阪和国道（国道26号線）の建設に伴って、大規模な発掘調査が行われ、弥生時代中期を中心とする大規模環濠集落が明らかとなり、数々の成果があげられたことによります。遺跡の中心部は国指定史跡として保存されております。

平成7年度に実施された史跡整備のための調査では遺跡中心部において、方位にそった高床式の大型掘立柱建物や大型くり抜き井戸などが発見されました。この建物に残された柱の年輪年代測定法による分析の結果、大型掘立柱建物が紀元前52年直後に構築されていたことが明らかになりました。弥生時代の流れを知る上ではっきりした定点が判明したことは画期的なできごとで、各界の注目を集めました。現在は史跡の活用を図るための公園整備が進められています。

今回の調査は、府道池上下宮線建設に伴う西端の調査で、池上曾根遺跡の北東部にあたり、地元関係者ならびに関係機関の多大な協力をいただきました。ここに記して厚く感謝の意を表し、池上曾根遺跡がこれからも弥生文化の研究に先駆的位置付けを果たすため、本調査とその成果が一助となることを願います。

平成12年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 小林 栄

例　　言

1. 本書は大阪府教育委員会が実施した都市計画道路池上下宮線建設に伴う、和泉市池上町所在池上曾根遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地調査は大阪府土木部交通政策課より依頼を受け、平成11年11月に着手、平成12年3月末にすべての事業を終了した。
3. 現地調査・本書の執筆は文化財保護課調査第1係技師、西川寿勝が担当した。
4. 本書に掲載された出土遺物の挿図・図版番号は巻末の対照表に示した実測番号に対応する。掲載された遺物には実測番号を注記し、保管・活用のために配慮した。
5. 遺構図の基準高は東京湾平均海水位（T.P.）数値を、方位は磁北を示す。
6. 今回の調査区は以前に本府教育委員会によって行われた調査区（97-6区）と部分的に重なる。土層名・遺構表記・土器型式などは前報告書（大阪府埋蔵文化財調査報告1998-1『池上曾根遺跡』1999.3）に準拠した。ただし、層位・遺構の性格などについては合致しない部分もある。統一できなかったところは本書執筆者の責にある。



4区第3遺構面上面出土須恵器坏

目 次

第1章 これまでの調査成果.....	1
1. 調査位置	
2. 調査方法	
3. 層序	
第2章 発掘調査.....	5
1. 歴史時代	
2. 弥生時代終末期	
3. 弥生時代中期	
第3章 まとめ.....	15
実測遺物登録対照表	
抄録	

挿 図 目 次

図1 池上曾根遺跡地区割表示図.....	1
図2 周辺調査区位置図.....	2
図3 地区割図及び標準土層図.....	3
図4 周辺土層柱状図.....	4
図5 第2・第3遺構面全体図及び遺構堆積状況図.....	6
図6 出土遺物実測図1	7
図7 出土遺物実測図2	9
図8 第4・第5遺構面全体図及び自然河川堆積状況図.....	11
図9 周溝状遺構平面図.....	12
図10 周溝2-3土器検出状況.....	13
図11 石庖丁未製品.....	13
図12 出土遺物実測図3	14
図13 男根状土製品.....	16

図版目次

表紙カット写真 1区周溝1-1出土壺

例言カット写真 4区第3遺構面上面出土須恵器壺

目次カット写真 2区自然河川出土甕

図版カット写真 2区周溝2-2出土壺

図版1 1. 1区第1遺構面全景（北から）

2. 1区第2遺構面全景（北から）

3. 3区第1遺構面全景（東から）

4. 3区第2遺構面全景（東から）

5. 1区第3遺構面全景（北から）

6. 2区第3遺構面全景（北から）

図版2 1. 1区第4遺構面全景（北から）

2. 1区周溝1-1堆積状況（南から）

3. 2区周溝2-1全景（南から）

4. 2区周溝2-1堆積状況（西から）

図版3 1. 2区周溝2-3全景（南から）

2. 2区土器出土状況（東から）

3. 2区自然河川出土土器群（北から）

4. 2区自然河川全景（西から）

図版4 1. 男根状土製品

2. 石庖丁木製品（緑色片岩）

3~5・9. 打製石槍（サヌカイト）

6~8. 打製石鎌（サヌカイト）



2区自然河川出土甕

第1章 これまでの調査成果

1. 調查位置

池上曾根遺跡はこれまで広域にわたって大規模に発掘調査が続けられてきた。なかでも遺跡中枢部の東側を南北に分断する国道26号線の調査と、中枢部北側を東西に分断する都市計画道路（府道松ノ浜曾根線・府道池上下宮線）による緊急発掘調査は弥生文化を考える上で様々な成果を提示してくれた。しかしながら、皮肉にも開発に伴う発掘調査によって、遺跡の重要性と保存の必要性が推し量られる結果となつたことに留意しなければならない。

平成になって遺跡の活用・整備が遅まきながら試みられ始めた。平成3年度の大坂府立弥生文化博物館の開館、現在も続けられている史跡池上曾根遺跡整備委員会による史跡指定地内の発掘調査と大型建物などの復元整備である。

以上の成果については府道池上下宮線にともなう発掘調査成果を記した本府による96年度発掘調査概要と98年度埋蔵文化財報告に整理して記載されている。今回の発掘調査は府道池上下宮線にともなう残り部分すべてであり、上記した遺跡の東西と南北を横切る都市計画道路において最終の調査になる。目下のところ、遺跡の中核にかかる破壊はひとまず収束したといえよう。

さて、調査位置は国道26号線に府道松ノ浜曾根線・府道池上下宮線が取りつく交差点東側にあたり、池上曾根遺跡中頸部の北東隅に位置する。よって、調査区の西は国道26号線に伴う昭和45年度調査のN区と接し、中央は府道池上下宮線に伴う平成9年度97-6区と、東は97-5・7区と接する。また、今回の調査は現道路の切り替え、用地買収の都合などから1~5区に分断した調査となった。このうち、5区の詳細な調査成果と発見された遺物については本書にすべてを掲載できなかったため、後出する報告書を計画している。

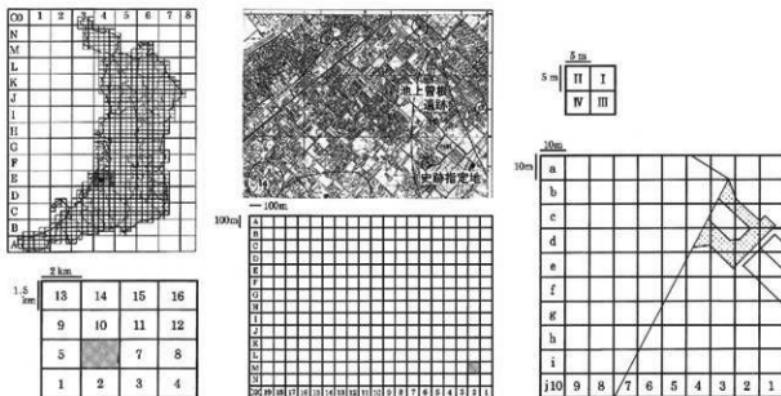


図1 池上曾根遺跡地区割表示図

2. 調査方法

今回調査区は東西15m、南北約22mのコ字形で、97-6区を東から囲むように位置する。その位置表示は国土地標を使用、X・Yの座標値で示し、これまでに行われた調査と整合できるようにした。ただし、平成9年度の調査は測量委託して航空写真測量を行ったのに対し、今回調査では工事用の基準点から手測量した方眼を平板測量の図面に重ねたので精度は一致しない。そして調査区の西側に接して1968~69年に発掘調査がなされている。当時は開発予定地を区分する形で地区割りされており、今回の成果と整合させることができなかった。

さて、今回調査区のある和泉市池上町は大阪府発行1/2500地形図（都市計画図）のE4にあたる。これを基準として、12等分した500m四方の方形区画をさらに25等分する。調査区が位置する100四方の方眼は大阪E4-6-M2と示すことができる（図1・3）。

前述したとおり、今回の調査は現道路の切り替え、用地買収の都合などから調査順に1~5区に分断しておこなった。なお、今回調査区はいたるところに搅乱があり、良好な遺物包含層が残されておらず、遺構数も少なかったため、地区割をせずに遺物は調査区別に層ごと、遺構ごとに取りあげた（図4）。

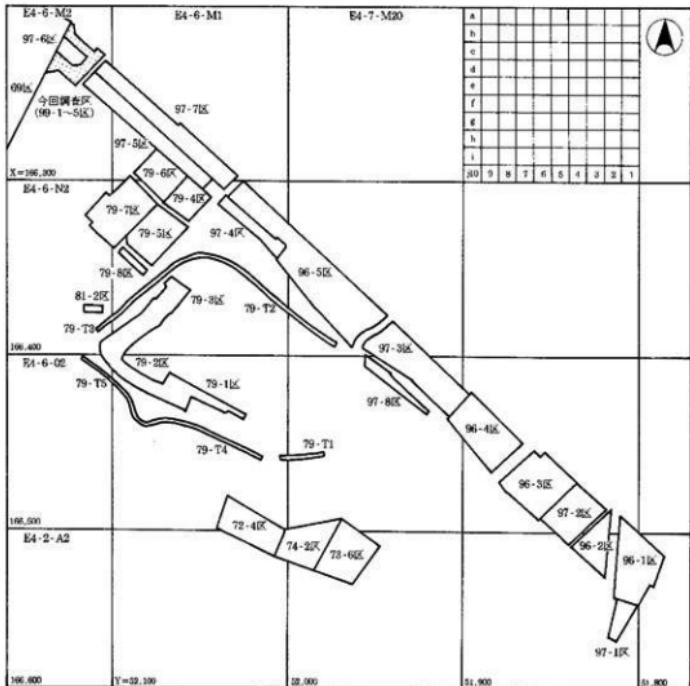


図2 周辺調査区位置図

3. 層序

調査区周辺は現在宅地化が進んでいるが近年まで水田が広がる光景がみられた。本調査地も旧府営住宅が建設される以前に水田だったことが、戦前の航空写真や古地図などで確認できる。

調査直前、該当地は厚い盛り土に覆われていた。その盛り土を重機で除去すると商業広告看板などの基礎、道路埋設物などがあり、その下に水田耕土（第1層）がみられた。水田耕土を除去すると層厚約10cm前後の黄褐色土層（第2層）が残されていた。この層が近年までの水田床土にあたる。この層を切り込んで営まれた面を第1遺構面、この層の下面を第2遺構面として調査した。これまでの調査では両遺構面とも江戸時代中・後期にあたる、とされる。

第2遺構面の基盤となる灰褐色土層（第4層）は古墳時代から中世までの遺物をふくむ包含層である。包含層を除去すると弥生時代の遺物包含層である灰褐色砂（第5・6層）・明黄色土（第7層）・暗茶褐色土などがある。弥生遺物包含層のうち砂質の堆積物は3～4区を覆う自然河川が起源と考える。自然河川は弥生時代前期～終末期の遺物が含まれていた。

その下には黄褐色粘土の地山がある。ところによっては砂れきを大量に含む。また、地山直上は部分的に茶褐色に変色していた。弥生時代の遺構はすべて地山を切り込む形で検出された。以上の堆積物に関する詳細はこれまでの報告に詳しく述べ、今回の成果も大筋準拠できた。

さて、東西に貫かれた道路予定地内でこれまでの調査成果を概観したところ、弥生時代の遺構面の起伏は今回調査地周辺がもっと高いことがわかる。この高まりを西に乗り越えるように自然河川や溝が切り込まれたようだ。しかし、度重なる氾濫と浸せつによって複雑な堆積層を形成したことが今回の調査でも読み取れた（図4）。

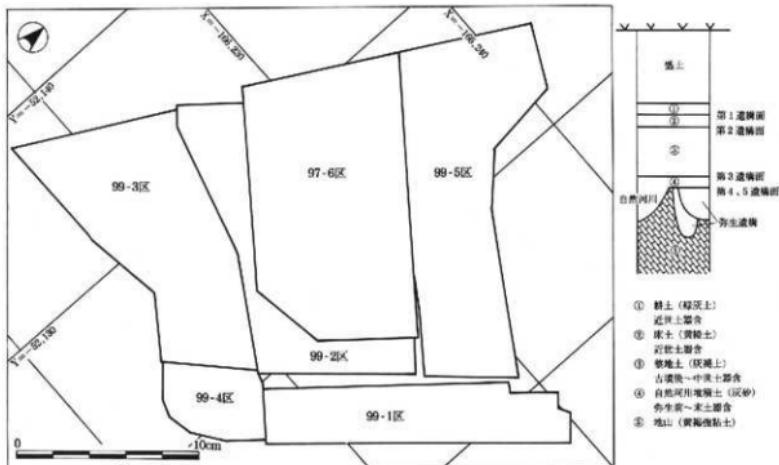


図3 地区割図及び標準土層図

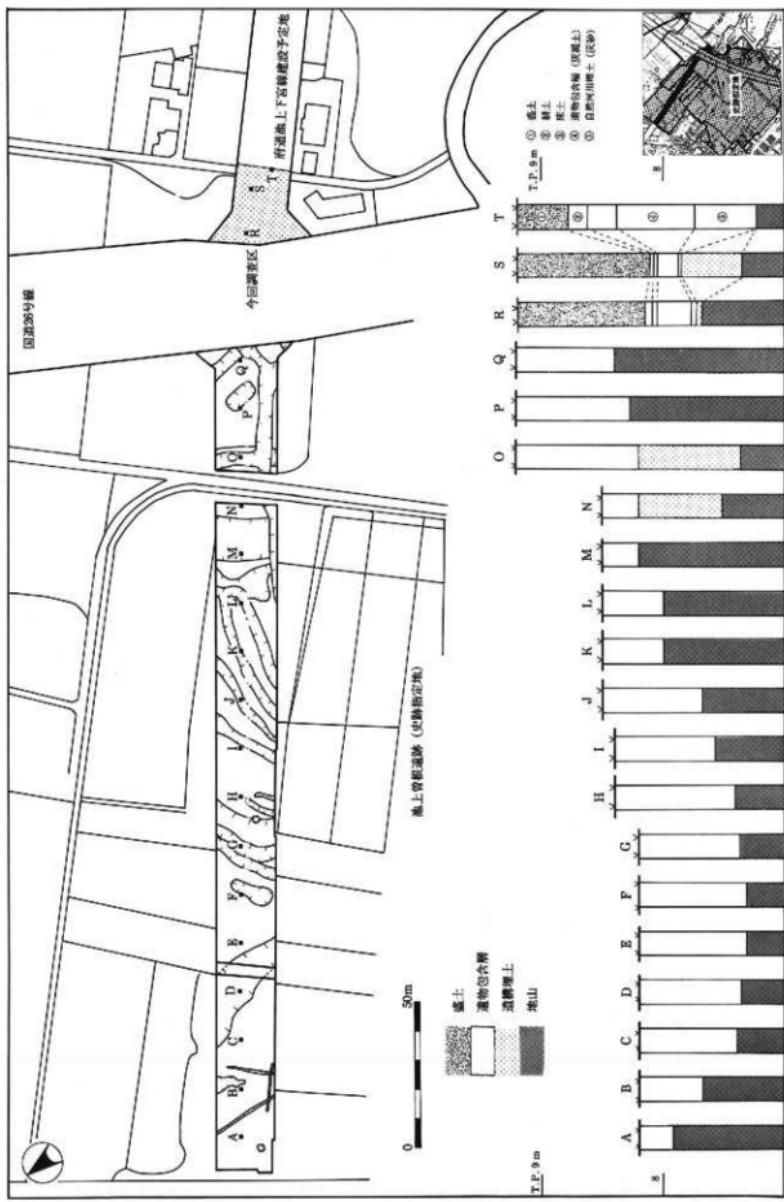


図4 周辺土層柱状図

第2章 発掘調査

1. 歴史時代

国道26号線調査によって発見された遺構は砂で覆われた上に鉄板を敷きつめ埋戻しされた。道路建設はこれらの養生措置の上から行われた。よって、路面は旧地表から極端に高くなり、今回調査区もところによっては旧地表の上に約2m近くの盛り土が施されていた。この盛り土を除去すると水田耕土が部分的に残されていた。ただし、盛り土に含まれていた残滓・ガラによって遺存状況は悪い。

水田耕土を人力によって除去すると床土に切り込まれた遺構が確認できた。また、1区の里道西側には用水路が營まれており、水田区画の一端が伺える。いずれも近世遺構の水田に伴うものである。第1遺構面とした(図版1-1・3)。

第1遺構面の基盤になる水田床土(黄橙粘土層)を除去すると、各区で砂利混じりの灰褐土層が現れた。この上面を精査するといくつかの耕作溝が確認できた。第2遺構面とする。両遺構面で確認した遺構は方位にそっておらず、現状で確認できる条里制区画にのったものだった。今回調査区では1区西側で確認できた用水路が坪境にかかわるものと推定できる(図5)。

第2遺構面の基盤となる灰褐土層はいくつかに分層できるが明確な遺構面をとらえがたく、水田開発に伴う整地土と考える。この中には弥生土器・古墳時代後期から奈良時代の須恵器・土師器、平安時代の黒色土器、鎌倉時代・室町時代の瓦器・陶器・瓦などが含まれていた。

最終的に、整地は中世後期以降に完成する。灰褐土層はこれまでの池上下宮線建設に伴う調査をはじめ広域にわたって確認できる鍵層にもなっている。

付近の調査で見られる大規模な整地でも、古墳時代から平安時代にかけての遺構は破壊されたようだ。これまでの調査で各時期の遺物が数多く発見されている。しかし、該当時期の顕著な遺構は見つかっていない。

ところが、史跡指定地内に認められる方位に添った構築物や地割りの痕跡について、中世段階で形成された遺構である案が最近になって提示された。これは弥生時代に都市型の方位に添った地割があったことを再考させる。今回調査区は方位に添った地割り復元案の東北隅に位置する。確かに、整地土には中世瓦が40片近く含まれていた。付近に建物があった可能性を示唆する。残念ながら、方位に添った明確な遺構は見つからず実態の解明は出来なかった(図版1-2・4)。

灰褐土層を除去すると弥生時代終末の土器を含む自然河川堆積物が調査区を広範囲に覆っていた。調査区南端で自然河川の流路跡を確認している。これら河川の氾濫とその堆積物によって、弥生時代の主要な遺構は整地による搅乱を免れたことがわかる(図5 図版1-5・6)。

発見された遺物はコンテナ4箱に及ぶ。古墳時代後期の須恵器・土師器、奈良時代の須恵器・土師器、中世の瓦器・陶器・瓦、近世の陶磁器などがある(図6)。いずれも第1・第2遺構面の遺構に伴う遺物ではない。

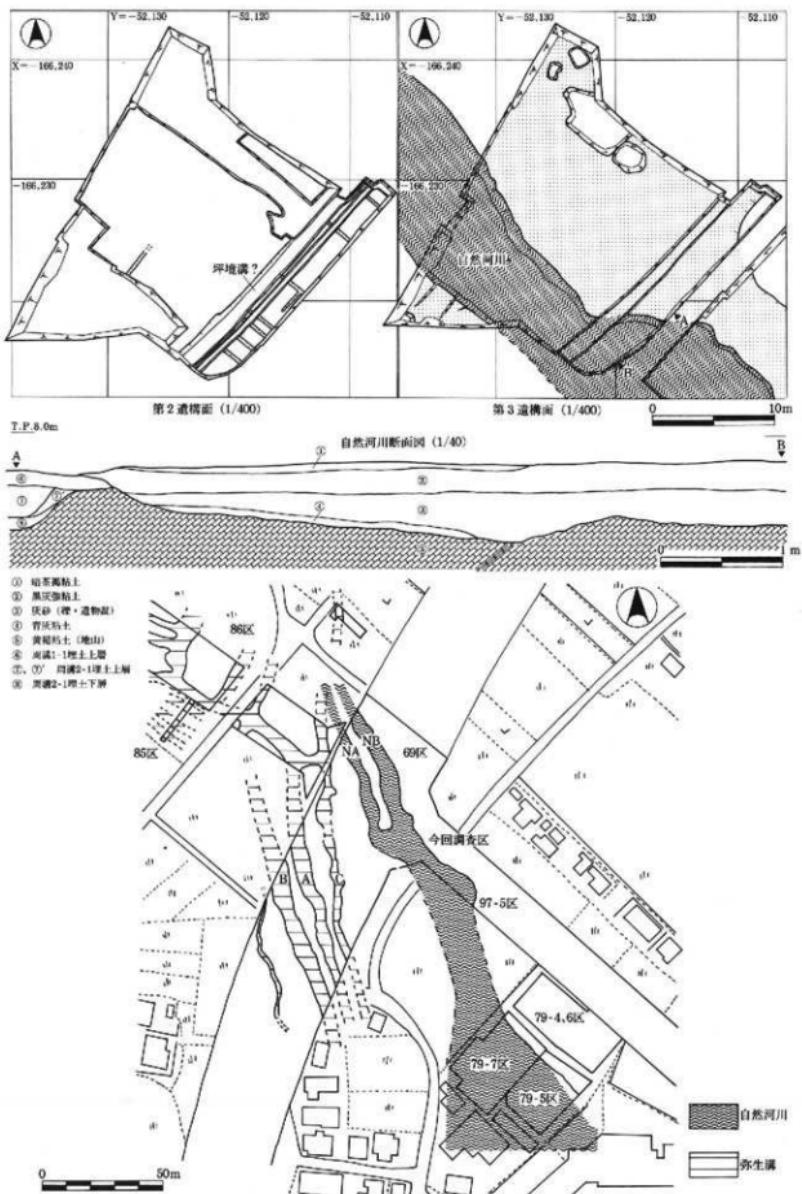


図5 第2・第3造構面全体図及び自然河川堆積状況図

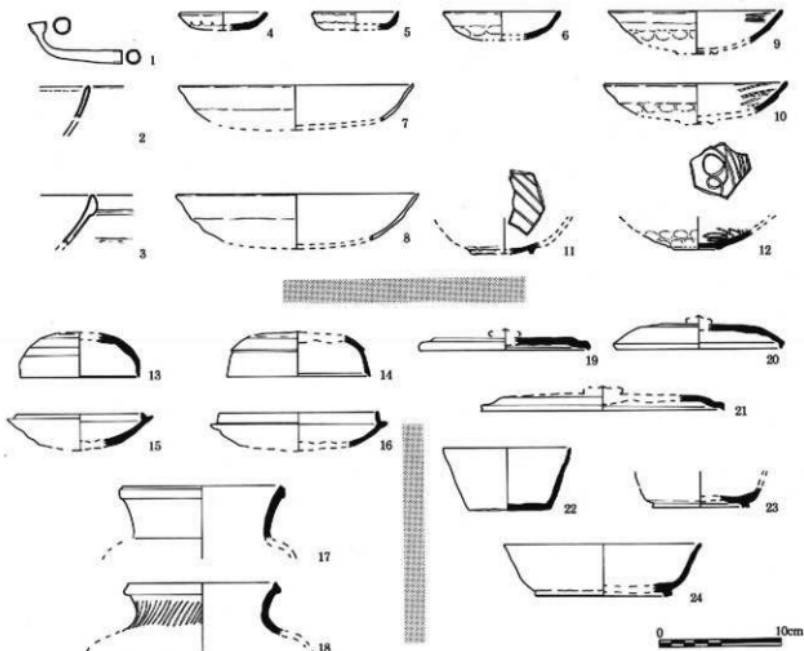


図6 出土遺物実測図1 (1/4)

古墳時代の土器には須恵器蓋坏・高坏・器台・甕などがある(図6 13~18)。後期後半から終末頃の各時期のものがある。

奈良時代の土器は土師器皿・甕、須恵器蓋坏などがある。土師器は表面が摩滅して細かい調整が判然としない。須恵器蓋坏はすべて小型、坏身は高台をもつものとないものがある。口縁端部は丸く尖り気味である(図6 19~24)。

中世の土器には土師器・瓦器・瓦・磁器などがある。いずれも小片である(図6 2~12)。瓦器は鎌倉時代中期以降のものである。磁器には青磁(図6 3)と白磁(図6 2)がある。

近世の遺物には陶磁器・キセルがある。キセルは青銅製の雁首部分が見つかった。火受けの接合は鋸で明瞭ではない。

2. 弥生時代終末期

灰褐粘層を除去すると調査区の大半は灰砂層・暗茶褐色土層に覆われていた。河川の氾濫を起源とする土砂堆積と考える。土砂層を取り除くと3区、4区の地山を南北に切り込んだ形で幅約4mにわたる自然河川が発見された。自然河川堆積物中に含まれていた遺物の大半は弥生時代中期の土器だったが、前期~終末期の土器も含まれる。とくに上面から弥生時代終末期の甕・高坏な

どがまとまって発見された（図10 16～19）。甕にはススが厚く付着しており、使用痕跡が明瞭に残るものだった（目次カット写真 図版3 1・2）。

自然河川の堆積層は時期ごとに区分することが出来なかった。自然河川は97年度調査の5・7区で発見されたものの続きで、さらに国道26号線に伴う調査で発見されたN a・N b溝につながると考える。N a・N b溝はその形状から人工的な規制を受けているという報告があり、下流では自然河川を何だかの形で制御し、集落外へ排水したか、生産域に治水したことがうかがえる。また、97-5区の南で行われた池上小学校建設に伴う7区の調査ではこの自然河川に伴ってシガラミが検出されている。シガラミは弥生時代後期と考えられている。

自然河川から出土した遺物はコンテナ30箱を数える。大半は土器である。発見された遺物の詳細な観察を含む整理報告は別に計画している。今回は石器を中心に報告する。

石器にはサヌカイト製の打製石器とその剥片・石核、磨製石器にかかる緑色片岩製の剥片がある。

打製石鎌は凹基式のものと凸基式のものがある。概して肉厚でつくりは粗い。狩猟用と考える（図版4 6～8）。凹基式は現存長2.5cmを測る（図7 1）。凸基式は完形で最大長3.1cm、最大幅1.5cm、最大厚0.7cmを測る（図7 2）。他に先端部のみで最大厚が0.5cm程度であることから石鎌の可能性が高い破片がある（図7 3）。

打製石錐はT字形で扁平、先端を欠損し現存長3.1cmを測る（図7 4）。

打製石槍は木葉形、紡錘形の二種類ある（図版4 3～5・9）。木葉形のものは扁平で先端を欠損し現存長5.1cm、最大幅2.7cm、最大厚0.8cmを測る。精緻なつくりである。不純物を多く含む石質で青灰白色に風化する。香川県金山産の石材によると考える（図7 5）。

紡錘形の一つは小型で、基部の一部を欠損するが最大長は5.1cmであることがわかる。最大幅は2.5cm、最大厚は1.4cmを測る。粗製だが重厚である（図7 6）。他に、先端と基部を欠損するものがある。表面は摩滅がひどい。現存長は8.7cm、最大幅2.5cm、最大厚は1.6cmを測る。粗製だが重厚である（図7 8）。

平基式のものは刃部を細かくつくり出すが稜線が通らず片面は自然面が残る。最大長6.2cm、最大幅2.4cm、最大厚は1.1cmを測る（図7 7）。

その他、4区の自然河川上面から男根状の土製品が発見された（図13 図版4 1）。形態は写実的で、先端から小孔が貫通する。基部を欠損し、現存長6.9cmを測る。明確に自然河川に伴うものではなく上層の搅乱によって持ち込まれたらしい。色調は淡褐色、胎土に石英や河砂が大量に含まれる。弥生土器の胎土・色調に共通することから弥生時代のものであることは間違いないだろう。

池上曾根遺跡では国道26号線の調査、M地区B溝（図5）でII様式の土器に伴って男根状木製品が発見された。他にも男根状の土製品が発見された弥生遺跡に兵庫県七日市遺跡・丁柳ガ瀬遺跡などの類例がある。

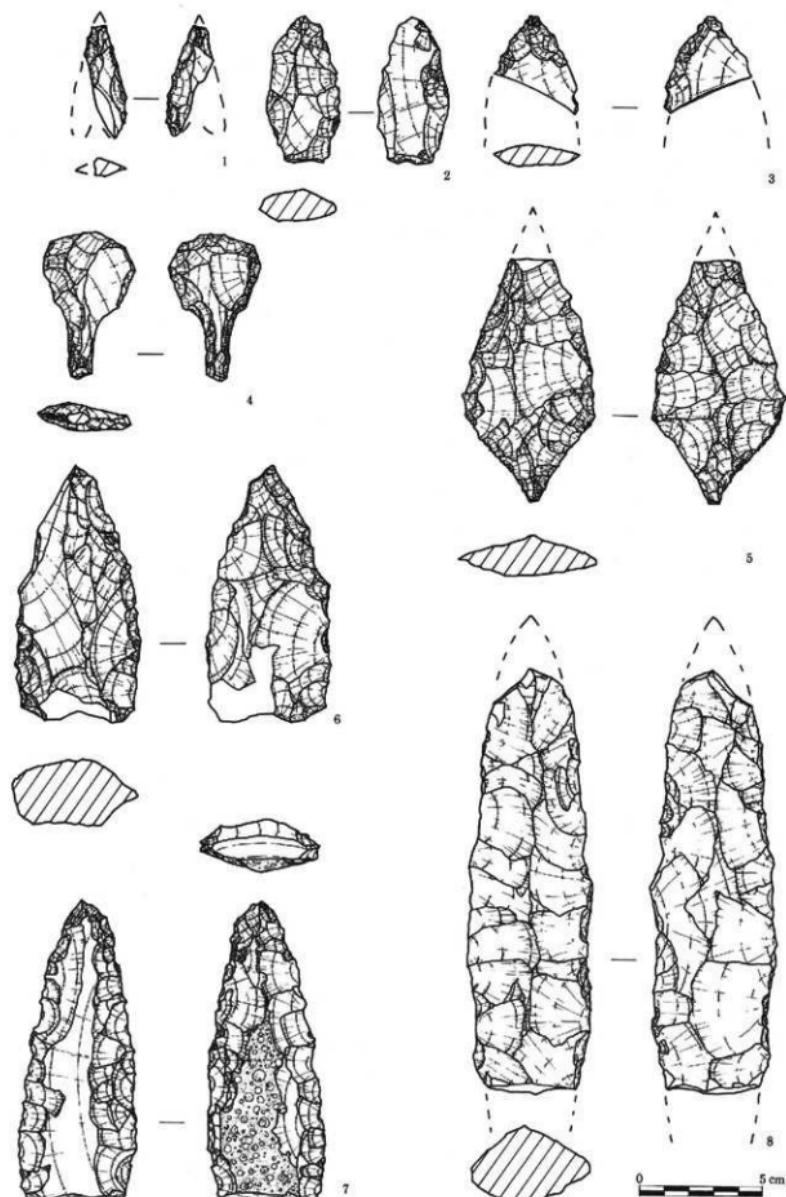


図7 出土遺物実測図2 (1/2)

3. 弥生時代中期

3区・4区を覆う自然河川堆積物を除去すると1・2・5区で何条かの溝が切り合って検出された。これらの溝は97-6区でみつかった溝群に取りつくものもある。溝は直角に折れ曲がったり、完形の弥生土器が落ち込んでいたり、埋め土に流水・帶水の痕跡がなく、徐々に埋没、あるいは人為的に埋め立てられたものもある。以上から97年度調査で発見された墓域がこの地域まで及び、方形周溝墓群があったと予想した。しかし、周溝墓を決定づける明確な主体部はのこされていなかった。また、調査範囲ではどの周溝も全周が確認できなかった。現段階では周溝墓の可能性を評価して報告する(図8・9)。

1区で発見された周溝1-1は幅約1.5m、深さ約0.8m、調査区中央では直角に折れ曲がる溝である(図版2-1)。97-5区のSD169に取りつく。SD169からは弥生時代中期前～中葉の土器が発見されている。今回は完形の壺一個体以外にほとんど遺物がなかった(図10-6 表紙写真)。周溝の埋め土下層は地山粘土ブロックを大量に含む暗灰強粘土で、上層はゆっくりした堆積を示すしまった茶褐色土だった(図版2-2)。また、周溝内側に盛り土状の高まりを確認した。墓壙は発見できなかったが弥生時代前期後半の土器が少量含まれていた(図10-1～5)。

2区で発見された周溝2-1は幅約1.8m、深さ約0.6mを測り、北側は97-6区のSD109に取りつきほぼ直角に折れ曲がる(図版2-3)。南は1区の周溝1-1につながるのだろう。この溝は97-6区の北側でさらに直角に折れ曲がり5区に至る。その先はやはり周溝1-1に取りつくらしい。つまり、周溝1-1の南西にコ字形に接続する溝となる。ただし、この溝の下層は流水堆積による暗灰褐色砂層が約10cm程度あり、周溝の機能には疑問もある(図版2-4)。切り合いからみると今回発見された周溝群の中でもっとも新しい。少量の土器片と共に(図10-7・8・10～13・15)、石庖丁未製品が発見された(図12 図版4-2)。

周溝2-1の下からほぼ同じ形態で周溝1-1の南西にコ字形に接続する周溝2-2が検出された。周溝2-1より幅は広いがその輪郭は不定形である。上層の堆積物は他の周溝に削られてわからないが下層に残された堆積物を見るかぎり人工的に埋め立てられたことを示唆する粘土ブロックが主な構成要素となっている。また、周溝2-2の内側斜面には弥生時代中期後半の壺がづり落ちた形ではば等間隔に発見された(図10-14)。本来の周溝墓がこの溝によるものとすれば、周溝2-1は排水をかねて、掘り直されたものかもしれない。

周溝2-2の南西にもコ字形に接続する周溝2-3が確認された(図版3-1)。この溝の西側は自然河川によって破壊されている。周溝2-3は幅約0.5m、深さ0.2mと小規模である。南隅のコーナー部分で土器下半部が確認された。遺存状態が悪く、表面が剝離して復元し得なかった。壺型土器の下半部分が安置されたのだろう。土器棺だった可能性もある(図11 図版3-2)。

さらに周溝2-1の北側でも北にコ字形に重なって折れ曲がる周溝5-2が発見された。この溝の北側は調査区外へと続く。また、堆積土は周溝2-1と互層になり、共有しながら同時期に埋没したようだ。遺物は発見されなかった。

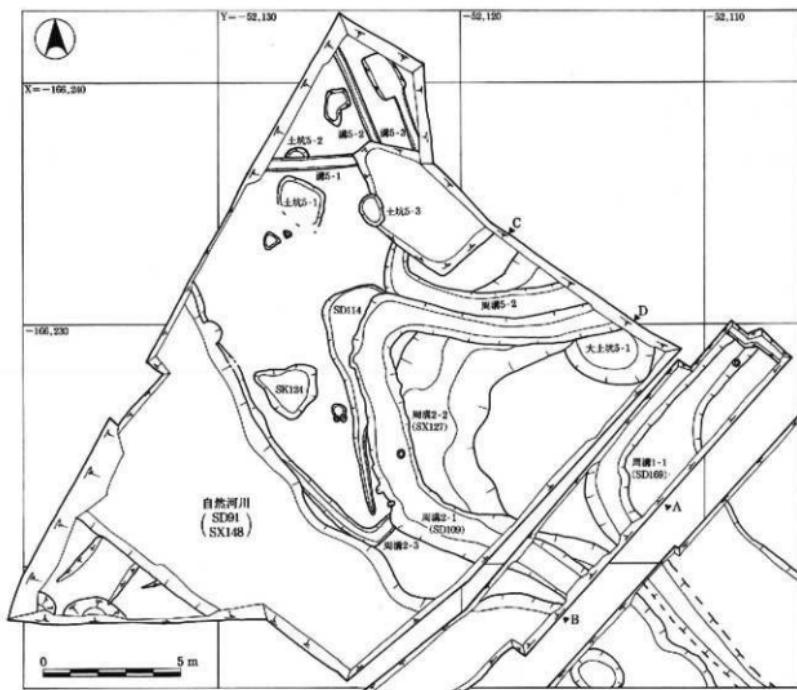


図4、5 遺構面(1/200)

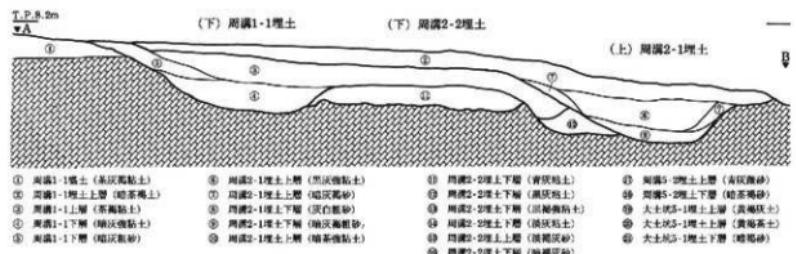


図8 第4・第5遺構面全体図及び遺構堆積状況図

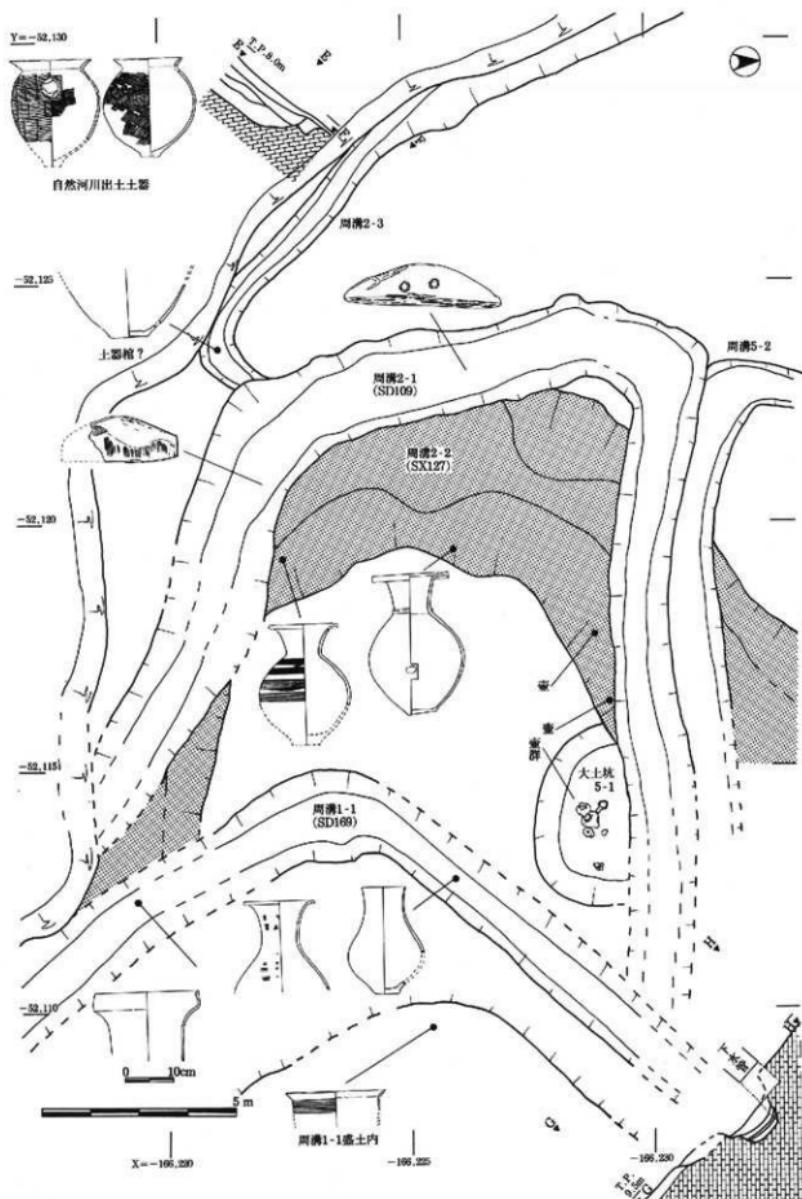


図9 周溝状遺構平面図 (1/100)

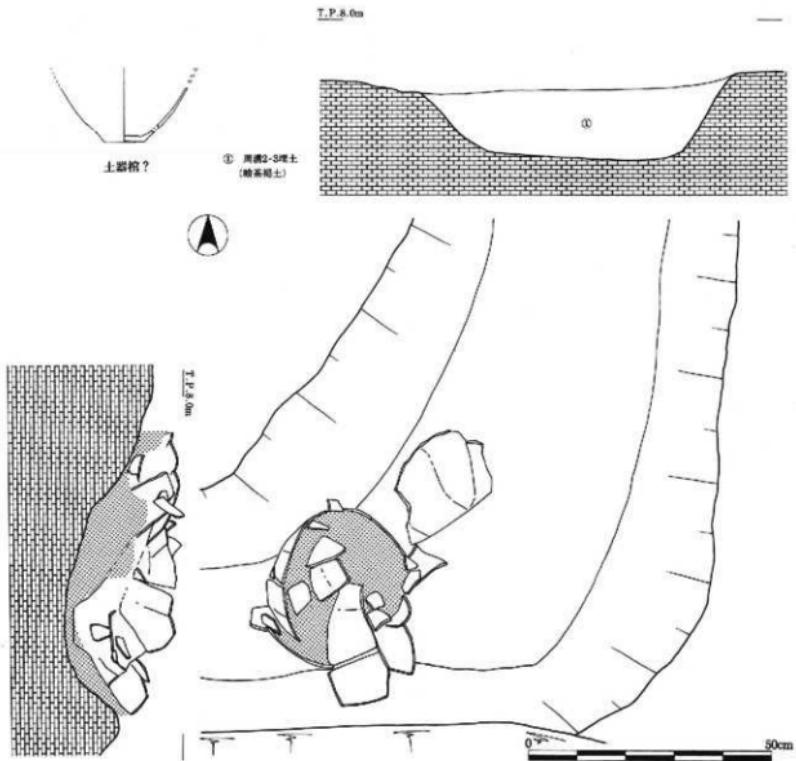


図10 周溝2-3土器検出状況

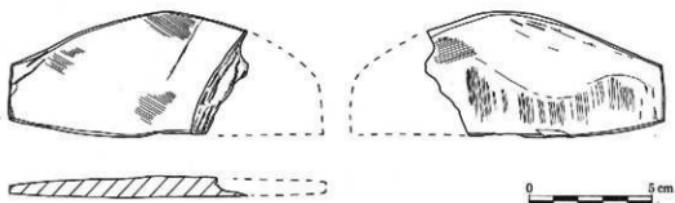


図11 石庖丁未製品

周溝2-1・周溝2-2に切られる橢円形の大土坑5-1が5区の東端で発見された。長辺約4m、短辺約3mを測る。底にはほぼ完形の壺・甕など数個体が投棄されていた。堆積土は地山粘土を大量に含むブロック土によっており、一気に埋め立てられたことがわかる。

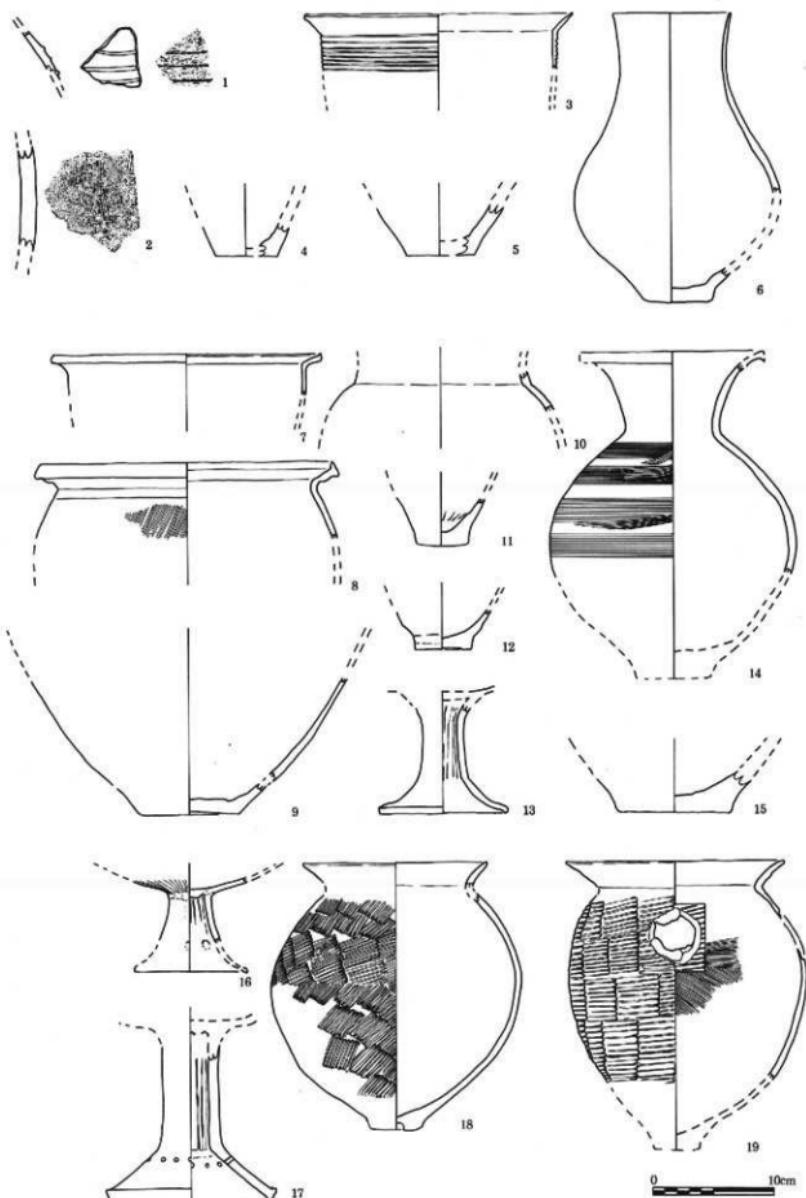


図12 出土遺物実測図 3 (1/4)

第3章 まとめ

今回の調査では弥生時代中期の土器を含む複数の溝が切り合って検出された。いずれの溝も全容が明確にできなかったものの、ほぼ直角に折れ曲がり、掘り底が水平でゆるやかな堆積状況を示すことから周溝墓の可能性を推定した。

調査区南側は自然河川によって弥生時代中期の遺構面は残されていなかった。ただし、これまでの調査によってこの自然河川は南東方向から北西に向かって蛇行しながら流れる河川で、ときおりの氾濫によって付近に堆積物をあふれさせる状況も把握できた。自然河川の流れと、付近の調査による弥生時代の地表面を検討すると、微地形はむしろ東が低温で西に高いことが確認できる。この高まりは国道26号線付近が頂点で、それより西側は急激に低くなることも知られる。自然河川は国道26号線の調査区では人工的に掘り直して、流路を規制していることが確認されている。この状況を評価すれば、西側の高まりによって本調査区付近で氾濫した水の一部は逃げ場を失い、人為的に排水する必要が生じたのだろう。

今回検出された周溝はこれらの水を受け入れる開渠の役割を兼ねたと考える。周溝2-1には明らかな流水堆積の痕跡があり、周溝2-2には掘り直しや人工的に埋戻された痕跡があった。ただし、埋め土の大半は有機物を含む土壤化した粘土層による。掘削後、肩部を崩落させながら徐々に埋もれていく様子がわかる。開渠の機能は一過性である。

さて、今回発見された周溝群からは明確な主体部が発見されず、周溝墓と断定することは出来なかった。しかし、周溝2-3のコーナー部に据えられていた土器は棺に転用されたものだった可能性もある。形態をよくとどめないが底部は弥生時代中期的様相だ。周溝1-1の内側に残された盛り土状の高まりには弥生時代前期後半以外の土器が見られず、これらの遺構が構築された時期はほぼ弥生時代中期段階に収まるものと理解できる。

周溝から発見された遺物で注目できるものは周溝2-2からみつかった壺群である。これらはいずれも完形に復元できるもので等間隔に離れ、周溝の内側上面よりづり落ちた形で発見されている。そのうちの一つは穿孔があり、供獻的な意味合いを示唆する。

各周溝はコ字形で、西の一辺を別の周溝と共有し、鎖状につながって東に発達して行く様子が復元できる。切り合いから、周溝1-1をもとにその東に、周溝2-2・周溝2-3が、周溝2-2をもとに周溝2-3が掘削されたと考える。周溝5-2は西側の状況が不明だが南側は明らかに周溝2-1の形を規定している。ただし、埋め土の堆積状況は両周溝が互層に折り重なる。開削時期は周溝5-2が古いようだが、両周溝はほぼ同時期に機能していたようだ。別の周溝が北側や西側にさらに存在すると予想できる。

以上、周溝を共有した弥生時代中期の墓群を復元するならば、墓群は世代をこえて意図的に関係をもつことが確かめられ、被葬者の血縁関係にかかわると想定できる。これまで、池上曾根遺跡の環濠集落周辺からは弥生時代中期の墓域が分散して数基づつ発見されている。主体部は周溝

に埋め捨てられた土器棺もあった。墓域の分散と墓内での埋葬格差を意味づけるとすれば、地縁関係だけの共同墓地があちらこちらにつくられたと考えるよりも、墓群は血縁関係を単位に分散し、構成員にも序列があったことを示している。しかし、個々の周溝墓は等質的で世代による優劣はない。この現象も当時の社会を反映するものだろう。そして、周溝墓群は弥生時代中期の内に消滅したらしい。それは集落中枢部の盛衰に対応している。

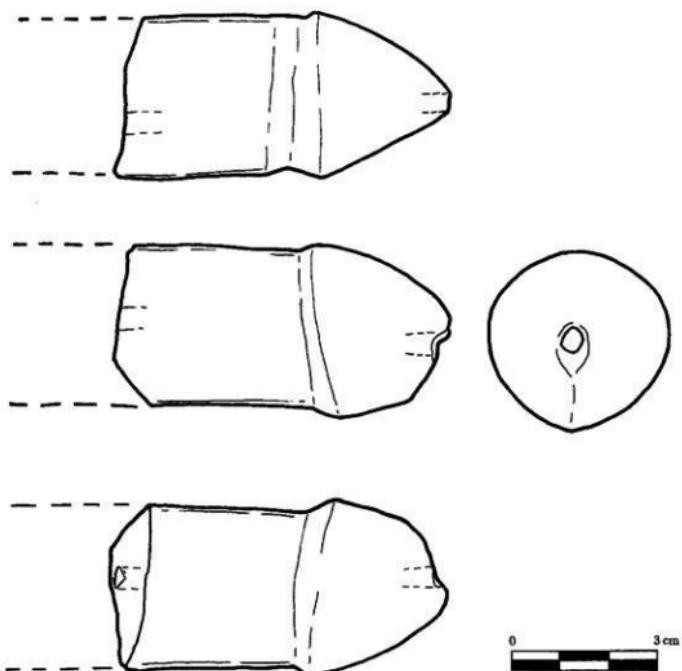


図13 男根状土製品（実大）

実測遺物登録対照表

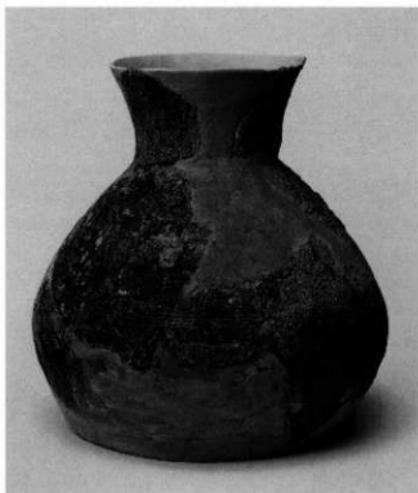
順番	器種・時期	挿図番号	図版番号	出土層位・遺構	遺存度合
1	打製石槍 弥生時代	図7-8	図版4-9	2区 自然河川	端部欠損
2	打製石槍 弥生時代	図7-7	図版4-3	1区 表土	完形
3	打製石槍 弥生時代	図7-5	図版4-4	4区 自然河川	端部欠損
4	打製石槍 弥生時代	図7-6	図版4-5	4区 第2遺構面上層	端部欠損
5	打製石鎌 弥生時代	図7-2	図版4-6	3区 自然河川	完形
6	打製石錐 弥生時代	図7-4		3区 表土	端部欠損
7	打製石鎌 弥生時代	図7-3	図版4-8	3区 自然河川	基部欠損
8	打製石鎌 弥生時代	図7-1	図版4-7	2区 表土	端部欠損
9	磨製石庖丁 弥生時代	図12	図版4-2	2区 周溝2-1上層	未製品
10	男根状土製品 弥生時代	図13	図版4-1	4区 自然河川上面	基部欠損
11	青銅製キセル 江戸時代	図6-1		4区 第2遺構面上層	把手欠損
12	白磁碗 鎌倉時代	図6-2		4区 第2遺構面上層	小片
13	青磁碗 鎌倉時代	図6-3		2区 第2遺構面上層	小片
14	瓦器碗 鎌倉時代	図6-9		3区 第3遺構面上層	小片
15	瓦器碗 鎌倉時代	図6-10		3区 第3遺構面上層	小片
16	瓦器皿 室町時代	図6-6		3区 第3遺構面上層	小片
17	瓦器碗 室町時代	図6-12		4区 第2遺構面上層	小片
18	土師器皿 鎌倉時代	図6-7		3区 第2遺構面上層	小片
19	土師器皿 鎌倉時代	図6-8		3区 第2遺構面上層	小片
20	須恵器坏身 奈良時代	図6-22	例言カット写真	4区 第3遺構面上層	石膏復元
21	須恵器坏身 奈良時代	図6-24		4区 第3遺構面上層	小片
22	須恵器坏蓋 奈良時代	図6-19		2区 第3遺構面上層	小片
23	須恵器坏蓋 奈良時代	図6-20		4区 第3遺構面上層	小片
24	土師器皿 室町時代	図6-5		4区 第2遺構面上層	小片
25	瓦器皿 室町時代	図6-4		4区 第2遺構面上層	小片
26	瓦器碗 鎌倉時代	図6-11		3区 第2遺構面上層	小片
27	須恵器坏蓋 古墳時代後期	図6-13		2区 第3遺構面上層	小片
28	須恵器坏蓋 古墳時代後期	図6-14		2区 第3遺構面上層	小片
29	須恵器坏身 古墳時代後期	図6-16		3区 第1遺構面上層	小片
30	須恵器坏身 古墳時代後期	図6-15		1区 第1遺構面上層	小片
31	須恵器壺 古墳時代後期	図6-17		3区 第2遺構面上層	小片
32	須恵器壺 古墳時代後期	図6-18		1区 第3遺構面上層	小片
33	須恵器坏蓋 奈良時代	図6-21		1区 第3遺構面上層	小片
34	須恵器坏身 奈良時代	図6-23		1区 第3遺構面上層	小片
35	弥生土器壺 弥生時代前期	図10-3		1区 周溝1-1盛土中	小片
36	弥生土器壺 弥生時代前期	図10-1		1区 周溝1-1盛土中	小片

37	弥生土器壺？ 弥生時代	図10-2		1区 周溝1-1盛土中	小片
38	弥生土器壺？ 弥生時代	図10-5		1区 周溝1-1下層	小片
39	弥生土器壺？ 弥生時代	図10-4		1区 周溝1-1下層	小片
40	弥生土器高杯 弥生時代	図10-13		1区 周溝1-2上層	脚部のみ
41	弥生土器壺 弥生時代	図10-12		1区 周溝1-2上層	小片
42	弥生土器壺 弥生時代	図10-15		1区 周溝1-2上層	小片
43	弥生土器壺 弥生時代中期	図10-8		1区 周溝1-2上層	小片
44	弥生土器壺 弥生時代中期	図10-7		1区 周溝1-2上層	小片
45	弥生土器壺 弥生時代	図10-10		1区 周溝1-2上層	小片
46	弥生土器壺 弥生時代	図10-11		2区 溝2-1上層	小片
47	弥生土器高杯 弥生時代後期後半	図10-16	図版3-3	2区 自然河川上層	脚部のみ
48	弥生土器高杯 弥生時代後期前半	図10-17	図版3-3	2区 自然河川上層	脚部のみ
49	弥生土器壺 弥生時代後期	図10-18	目次カット写真	2区 自然河川上層	石膏復元
50	弥生土器壺 弥生時代後期	図10-19	図版3-3	2区 自然河川上層	上半のみ
51	弥生土器壺 弥生時代中期	図10-6	表紙カット写真	1区 周溝1-1上層	石膏復元
52	弥生土器壺 弥生時代中期	図10-9	図版3-2	2区 周溝2-3コーナー部	土器棺？
53	弥生土器壺 弥生時代中期	図10-14	図版カット写真	2区 周溝2-2	石膏復元

報 告 書 抄 錄

ふりがな 書名	いけがみそねいせき 池上曾根遺跡 II						
福書名・巻次	拠点集落北方の墓域の調査						
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告1999-8						
編著者名	西川 寿勝						
編集機関	大阪府教育委員会						
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 ☎06(6941)0351						
発行年月日	2000.3.31						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °°°'	東経 °°°'	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
池上曾根 遺跡	大阪府和泉市 池上町	27219 99036	34° 29' 55"	135° 26' 30"	99年11月1月 ～ 00年3月31日	330m ²	都市計画道 路府道池上 下宮線建設 に伴う調査
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
池上曾根遺跡	環濠集落	弥生時代 中世 近世	方形周溝墓群 土坑 自然河川 条里制水田 条里制水田	弥生土器・石器 土器・瓦	周溝を共有する墓 群 供獻土器		

図 版



2区 周溝2-2出土壺



1、1区 第1造構面

2、同 第2造構面



3、3区 第1造構面

4、同 第2造構面



5、1区 第3造構面

6、2区 第3造構面



1、1区第4造構面



2、1区周溝1-1堆積状況



3、2区周溝2-1全景



4、2区同上堆積状況



1、2区周溝2—3全景



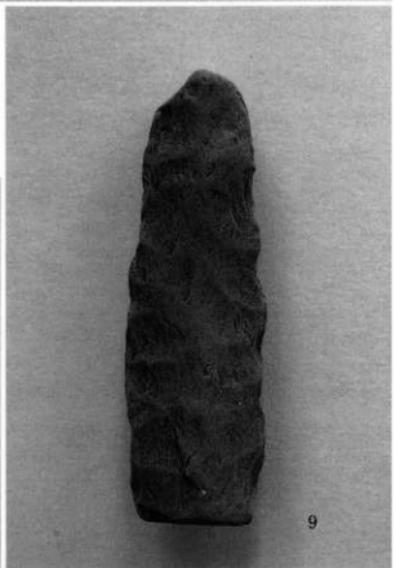
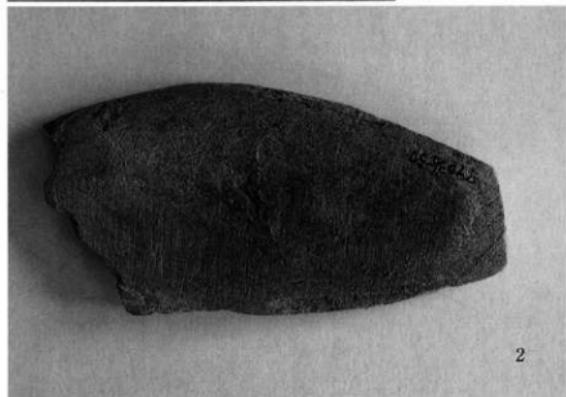
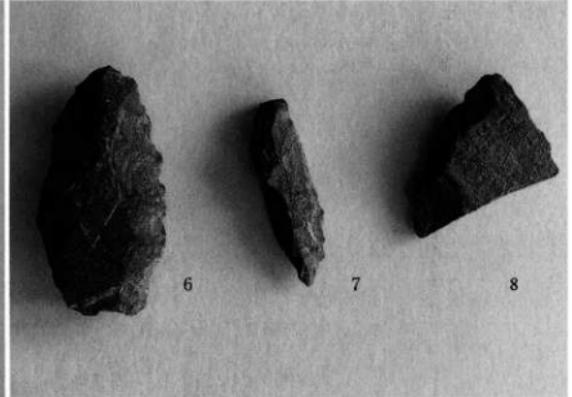
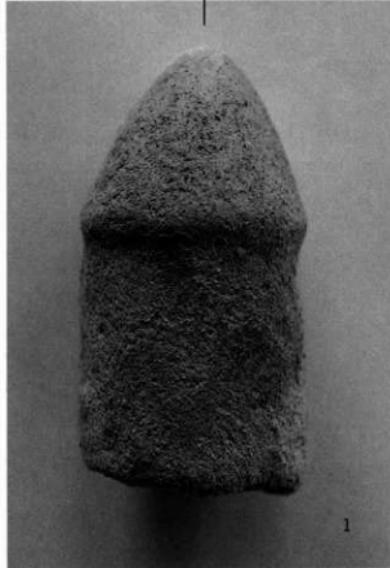
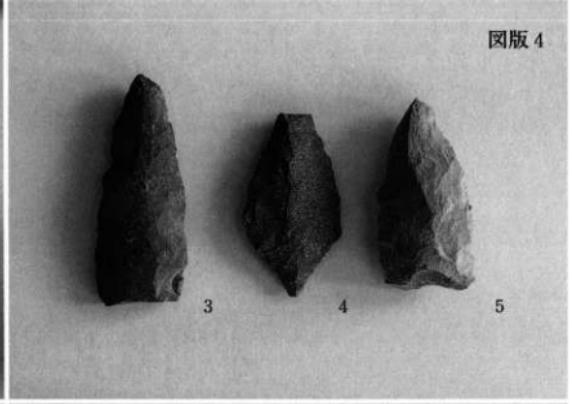
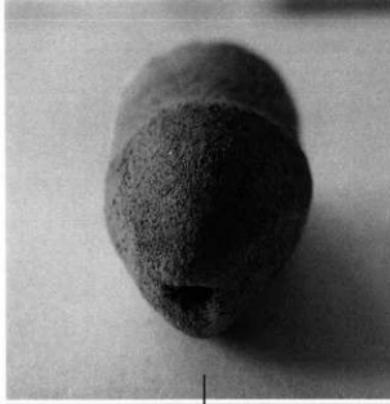
2、同上 土器出土状况

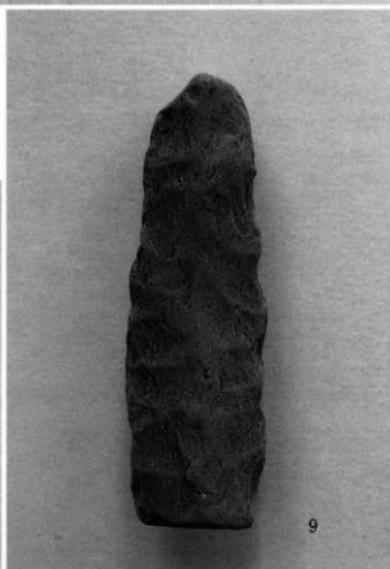
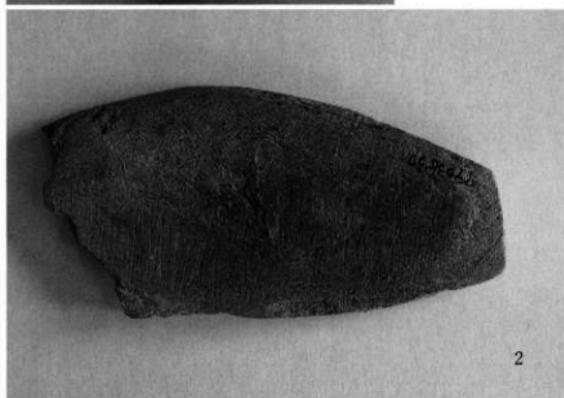
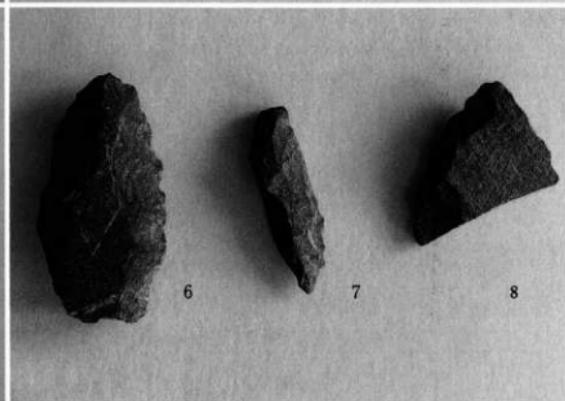
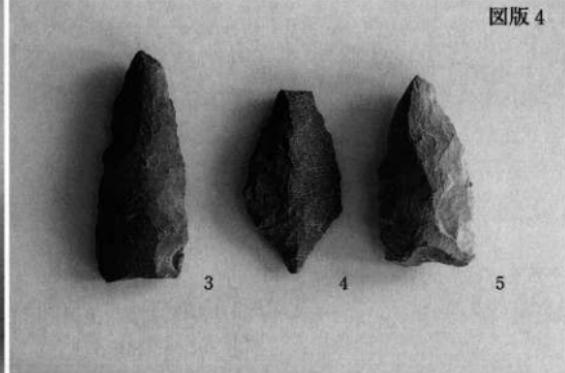
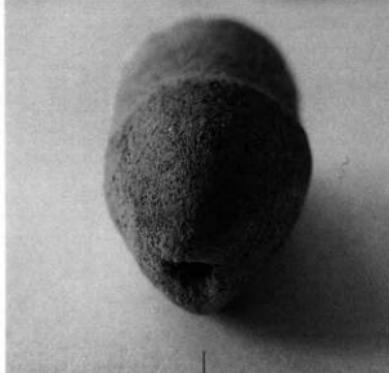


3、同上 自然河川出土 土器群



4、2区 自然河川全景





大阪府埋蔵文化財調査報告 1999-8

池上曾根遺跡II

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571

大阪市中央区大手前2丁目

TEL. 06-6941-0351

発行日 2000年3月31日

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

